

医療維新

シリーズ 「医学部卒後10-15年目の医師たち」～JCHO編～



大自然・北海道の産婦人科医、癒しの空間作りを目指して

東洋医学も取り入れ、人に優しい分娩目指す -テーマ2「地域包括ケア」 Vol.2-

オピニオン 2018年6月29日 (金)配信 JCHO北海道病院 産婦人科 小山 貴弘

小山 貴弘 Takahiro Koyama
JCHO北海道病院 産婦人科



【略歴】札幌市出身。2002年に北海道大学医学部を卒業し、初期研修は、北海道大学病院と函館中央病院で修了。その後、苫小牧市立病院、旭川厚生病院、北海道大学病院勤務を経て、2016年4月からJCHO北海道病院に所属し、現在に至る。

【所属学会・取得資格等】日本産科婦人科学会専門医・指導医、日本周産期・新生児医学会専門医。

私は分娩件数が年間500～600程度の、周産期を中心とした地方の総合病院の産婦人科に勤務しています。産婦人科病棟の病床数は25床で、ハイリスクの妊婦さんを集中的にケアするMFICUが別に3床あります。入院している患者さんは切迫早産や妊娠高血圧症候群、前置胎盤、双胎妊娠の方が多いです。患者さんの中には当院の外来から入院した方と近くの地域の病院やクリニックから搬送された方、また、車で2時間程度のさらに地方の病院から搬送される方もいます。自分の当直回数は週に1回程度ですが、これは大学病院から週2～3回程度、当直の応援に来ていただいているおかげです。

日々の診療のやりがいを糧に、誠意をもって

現在の職場を選んだ理由は、分娩件数や症例の規模が自分にとって多すぎることがなく、また適度にリスクのある症例とローリスク分娩が中心なので自分に合っていると思われたこと、JCHO北海道病院の理念が地域に根差した医療を目指していたことに共感したからです。そもそも自分が医師になろうと思ったのは高校生の時でしたが、人のために役立つ仕事であること、そして、それが自分に合っているのではないかと思ったことが理由でした。幼少時から母親に、自分が生まれた産婦人科医院の先生が素晴らしい人だったと聞かされていたことも影響していたかも知れません。

産婦人科医になって初めの数年間は当直回数がかかり多く、また、訴訟の話題もよく耳にする状況で心身ともに疲労していましたが、その時の教授が「どんな状況でも患者さんに誠意をもって対応すれば何とかなるんだ」という言葉をおっしゃられ、大いに励まされました。

今は産婦人科医師として働くことができていることに本当に感謝しています。

日々の診療は外来と病棟業務で成り立っていますが、やはり、患者さんが無事に分娩をして感謝して帰ってくれることが一番のやりがいだと思います。そして、街でお母さんに連れられた子供を見た時などに、「地域の人たちの役に立っているんだなあ」と実感することも大きなやりがいだと思います。

今のところ大きな悩みはないのですが、もっと同僚の先生方や他科の先生方、そして、助産師さんや薬剤師さんなど多職種の方々とうまく連携できればいいなと思っています。もっとお互いの仕事内容を理解し、共感することができるのではないかと思います。また、妊娠中の管理や分娩時の管理、帝王切開の技術も向上させていきたいですし、患者さんの気持ちを十分に理解することにも努めていきたいです。

地域の方々から信頼される癒しの空間を目指して

近い将来については、まず、自分の医療レベルをさらに向上させたいです。具体的には、以前から興味があり、周産期や婦人科領域でも有用だと思われる東洋医学についての知識と技術を得ることに、ここ数年は力を入れたいです。というのも、漢方薬（生薬）はもともと自然界にあり、自然の治癒力を回復させるものなので、自然環境に優しく、当然、人の身体にも優しいと思われるからです。また、より安全で妊婦さんが出産の喜びを十分に味わうことができる分娩も目指していきたいです。



当院の「量もあるLDR（分娩室）」

地域包括ケアという視点から見て、それが、地域への貢献につながればもっといいと思います。そして、自分と患者さんと地域の方々がみんな幸せになる「win-win-win」の関係を築けたら最高だと思います。

現在のような少子化の時代に東京や大阪などの都会に住みたいと思うのは否定しがたいことだと思いますが、そういった状況の中でも、札幌のような日本の地方都市でも患者さんが安心して生活できるような地域医療を行っているのだということが、口コミなどで少しでも広がってくれるといいなと思います。

もっと先のことを言うと、病院の周囲には藻岩山や豊平川など豊かな自然が広がっておりますが、そういった自然豊かな環境の中で安心して出産ができる癒しの空間を作っていければと思います。現状では近隣にそういう場所はないと思いますが、例えば夏休みに田舎の実家に帰省した時に感じられるような心が落ち着く空間、そして、その時々北海道の四季を感じることができるような温もりのある空間を作りたいです。

15年間を振り返って

15年前の自分は目の前の仕事内容を消化することで精一杯でしたが、だいぶ俯瞰して仕事を見つめることもできるようになってきました。仕事柄、他の職場で働く先生方には何かとお世話になることが多いのですが、周産期の立場から一緒に明るい未来を築けると、この上ない幸せだと思っております。これは決して一人では成し遂げることのできないことなので、同じような価値観を持つ、一緒に働く医師やコメディカルがどんどん増えてきてほしいです。

後輩たち、特に産科を担っている、あるいは産科を志している若い先生方の中には、当直がきつかったり、患者さんや同僚との人間関係に悩んだりする人もいるかも知れませんが、確実に地域、さらには日本の未来のために貢献しているので誇りを持ってもらいたいです。自分のことでいうと患者さんのためにやっているのにクレームを付けられたり、上司から“期”の近い医師同士で比べられたり、理不尽なことを言われたりということがありましたが、今では辛くてもある程度余裕をもって受け入れることができている。そして、長く産科医療を続けるには心身ともに健康であることが必須なことだと思いますので、体には十分に気を付けていただきたいです。自分は気持ちが減ったり、肉体的に疲れた時はひたすら寝ることに徹しました。また、仲の良い先生と飲みに行くこともストレス解消になりました。

最後に産科医療に携わっている人もそうでない人も、医療を行う上で、楽しく診療を行うことは何より大切なことだと思います。例え苦しいことがあっても常に前を向いて楽しく仕事に励んでくれたらと思います。

JCHO尾身理事長が語る「テーマ2『地域包括ケア』」はコチラ

シリーズ 「医学部卒後10-15年目の医師たち」～JCHO編～ ▶